

俳句 大津俳句会

秋夕^{ゆやけ}焼燃えさかる如家^{ごと}二軒

岩崎由美子

散歩道^{いぢぢくう}無花果^{いちぢくう}熟れて欲しいまま

大塚喜久子

風よりも軽くなりゆく花^{はな}芒^{すすき}

岡崎 浩子

さざ波の上に映れり秋夕^{ゆやけ}焼

佐賀 久子

身^しに入^しむや老いてはるばる子の^{もと}許へ

佐澤 俊子

俳句 つのはな句会

綿菓子^{わたがし}の棒にからめる秋思^{あきおも}かな

榮田しのぶ

西郷の激戦地にも葛の花

村田 健二

竹の春 二の足を踏むデジタル化

志賀 孝子

深爪の胸にまつわる鳳仙花

田上 公代

蓑虫の鳴いて芭蕉の夢を追う

上杉 波

読み止しのページに溜まる残暑^{あきあせ}かな

矢嶋 道子

今日ありてコスモス畑をゆつくりと

梅木トキエ

名月やいつもどこかに君が居る

塚本 洋子

短歌 大津短歌会・野づかさ

初盆の友を偲びて花選ぶ白ゆりの花^{はな}けだか
き花を

吉田 良子

「死を思い、今を生きよ」と説く僧の鍛えし
声は御堂にひびく

荒木 麗子

日めくりをめくるがごとくすぎゆくかわが
七十の夏こののち

田中 玲子

笑えもうつ伏せ這うも泣く顔もかわゆきも
のよ女の曾孫

豊岡ミツル

〈敬老の日〉

劍豪の武蔵も愛せし桜湯と由来を聴きし
ち湯に入る

小平 善行

かすかなる風の渡ると知らするやさゆらぎ
立てりコスモスの花

吉永 恵子

肝あらぶごとき嵐の風うけて我が細胞は立
ちあがりゆく

坂本 杲子

水無川河原に細る水たまりかのアメンボら
いずこに往くや

鞍 岳志

新築の家の足場をひよいひよいと動く大工
の様を見飽かず

山本 泰子

月光をピアノに奏でし若き兵飛行せしめん
大空の涯

高村 貴子